

昭和維新運動

—大本教・出口王仁三郎を中心に—

徐 玄九

Showa Restoration (Showa-ishin) movement : mainly focusing on the case study of Deguchi Onisaburo, Oomoto

SEO, Hyunkoo

要旨：明治末期から大正期を経て昭和初期にかけて、いわゆる「第二維新」を掲げる多くの運動が展開された。日本のファシズム化の過程で結成された多くの国家主義団体は、ほとんど大衆的組織基盤をもっておらず、しかも、組織機構を整備していなかった。ごく少数の幹部が勇ましいスローガンを掲げていたに過ぎず、経済的基盤も弱かった。しかし、大本教および出口王仁三郎の思想と運動は、これまでのテロやクーデターに頼った右翼や青年将校に比べて、大衆組織力、社会への影響力という点で、群を抜いていた。

そして、大本教および出口王仁三郎の運動を「天皇制ファシズム」を推し進める他の団体、青年将校らと比較した場合、決定的に違う点は、テロやクーデターのような暴力的手段に訴える盲目的な行動主義とは一線を画し、「大衆的な基盤」に基づいて、あくまでも「無血」の「第二維新」を目指したことである。出口王仁三郎が追求したのは「民衆の力を結集すること」による社会変革であったのである。

キーワード：大本教、出口王仁三郎、「大正維新」、「昭和維新」

はじめに

「今や全世界を通じて何もかも行詰まりの状態に陥りつつあるので、人心の動揺不安は漸く其極点に対せんとし、気の強い者は何等かの方で世界の改造を唱へ、気の弱い者は憂愁の余り神経衰弱症に犯さるる有様である。何れも取るに足りない（傍点-原文）」¹⁾

今を物語っているようにも見受けられるが、実は大本教の信者・浅野和三郎（1874-1937）が1919年に書いた文章である。ここでいう「世界の改造」に政治的暴力が加わったことで生じた歴史的な不幸は今もなお爪痕を残している。

「戦争と革命の世紀」と称される20世紀の政治（権力）が人々を幸福にするどころか、なぜこれほどまでに多くの人々を不幸にしてしまったのだろうか。加害者のみならず被害者にも引き起こされた「道徳的崩壊」も含めて、この問いは、おそらく当時代を生き（た）、そして「考えた（る）」多くの人々に共有されていた根本的な問題意識であろう。

「坂の上」を目指して突進した時代、「健全なナショナリズム」の時代、「牧歌的な小国家イメージ」を有していた時代、「理想の時代」とも形容される「明治」という年号で区分された時代は、理想化された「欧米」から

の承認を目指し、その視線に規定されながら「日本が目指すべき理想の像」を非常にポジティブに抱いていた時代であった。隣の国の人々の目にもそのように映っていた。「理想をもつということは、理想の欠如としての現状を生きるということ」に他ならない²⁾。しかし、理想としての「欧米」に肩を並べ、「坂の上」にたどり着いたとたん、凄まじい勢いで「近代的な帝国主義のマシン」として機能する国家像へと変貌を遂げ、「欧米」ももはや「理想」ではなくなる。理想なき状態のなかで、果たして何が「今」に意味を付与できるのか。

「何もかも行詰まりの状態」を突破するために明治末期から大正を経て昭和初期まで多くの運動が展開された。そのなかでも、いわゆる「第二維新」（「大正維新」・「昭和維新」）運動は注目するに値する。「第二維新」を掲げたいずれの運動も、浅野和三郎のいう「何もかも行詰まりの状態」、あるいは「理想なき状態」からの脱出を目指していたものであったが、これらが目指した終着駅は「明治維新の徹底ないし完成」であった。橋川文三はこれらの思想や運動の性格を『失われた日本』『原始の日本』の探究と「伝統主義的な思考方法」と規定したことがある³⁾。だが、「政治的ロマン主義」⁴⁾の性格を多分に帯びていたこれらの運動がもたらしたその後の現実を決して望ましいものではなかったし、今なお政治的ロマン主義の脅威は少しも減少していない。

本稿において、大本教（とりわけ、出口王仁三郎）が展開した「皇道維新」（「大正維新」、「昭和維新」）に注

目する理由もここにある。以下は上記のことを念頭に置きながら大本教および出口王仁三郎が推し進めた「皇道維新」なるものの政治社会的な影響に焦点を当てて、同時代の類似する運動との違いや性格を浮き彫りにすることに主眼が置かれる。

同時代には大本教の「皇道維新」運動と類似するものが少なかった。にもかかわらず、なぜ大本教の出口王仁三郎なのか。その理由は二つある。第一に、西洋起源の普遍主義的理想を信奉することから既存の体制秩序を批判したマルクス主義者、またはキリスト教信徒（内村鑑三）とは違って、大本教の出口王仁三郎は日本の伝統を拠り所にしながら日本の現状を批判し、かつ、日本という枠組みを超えた使命意識と結びつけようとしていたからである。第二に、日本のファシズム化の過程でみせた大本教および出口王仁三郎の思想と運動は、これまでのテロやクーデターに頼った右翼や青年将校に比べて、大衆組織力、社会への影響力という点で、群を抜いていたからである。

1. 「皇道維新論」が登場する時代的・思想的状況

大本教は、1892年に京都の綾部で「神がかり」した出口なお（1836～1918）が、娘婿上田喜三郎（1871～1948、後に出口王仁三郎と改名）と「金明霊学会」（1899年）を結成したことから始まる新たな信仰共同体であった。教団は短期間に急成長を遂げるが、それには出口王仁三郎によるきわめて近代的で合理的な官僚制にも似たような形で行われた教団経営や布教戦略—機関誌や新聞などのメディアを駆使した布教—と時代的な要因が大きく作用した。大本教独自のメディアを通じて、理想的な社会像を提示しつつ、「何もかも行詰まりの状態」であると感じている民衆の言葉にならなかった経験や感情を

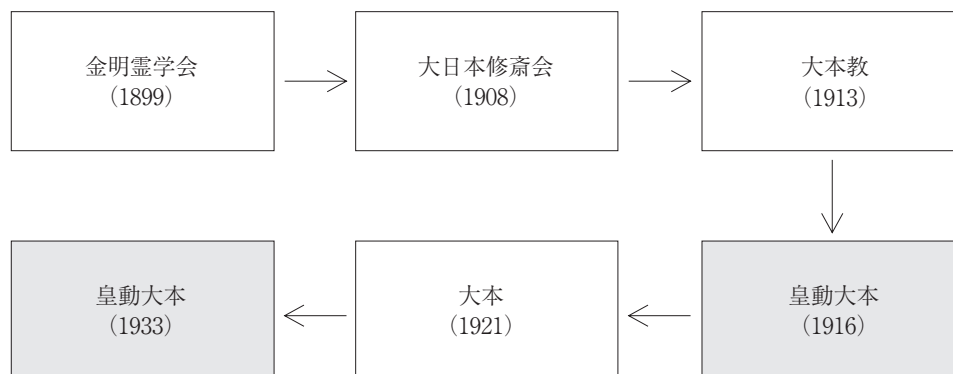
大本教の「文法」で「翻訳」し、その代弁に努めた。出口王仁三郎にとってこの理想的な社会は「皇道維新」を通してのみ達成可能なものであった。

〈表-1〉でみるように、大本教は教団組織の改編や国からの弾圧（第一次大本事件：1921年）などで教団の呼称が変化するが、とくに、教団の呼称に「皇道」が付けられた時期は大本教による「皇道維新」運動が最も活発に展開された時期でもある。

なお、〈表-2〉からも確認されるように、「皇道」という言説の使用頻度が高かった時期は大本教による二度の「皇道維新」時期とちょうど一致する。さらに〈表-3〉にみられるように「大本教」という言葉は1919年に最も多く使われ、世間の注目を集めていたことが伺える。この1919年は、先述した浅野和三郎の「大正維新の真相」が発表された年であり、雑誌『改造』が創刊された年でもあり、現状打破の思潮が強く表面化した年でもあった。たとえば、北一輝（1883～1936年）が上海において『国家改造案原理大綱』（一後に『日本改造法案』と改題）を、また権藤成卿（1868～1938年）が『皇民自治本義』（一後に改訂されて『自治民範』と改題）をそれぞれ著わし、革新的国家主義団体「猶存社」が設立されるなど活発な動きを見せるなどして、人々の意識が急激に流動化し始めた時期であった〈表-4〉。日本国外の状況も決して平穏ではなかった。ロシア革命（1917年）、第一次世界大戦の終結（1918年）、そして、日本が初めて大規模な民族抵抗運動に直面した朝鮮の3・1運動および中国の5・4運動の展開（1919年）など言葉通りの激変の時代であった⁵⁾。

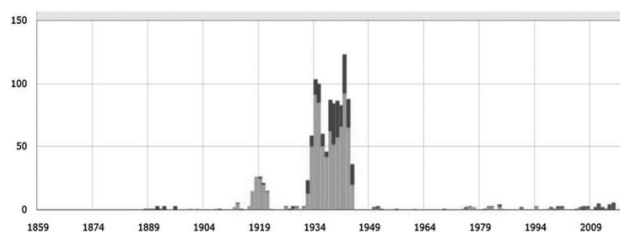
天皇の位置づけもまた大まかにみれば「明治」・「大正」・「昭和」のそれぞれで変化している。明治維新が「天皇」への信仰からある意味において自由であった者

〈表-1〉 「大本教団名の変遷」



出典：大本七十年史編纂会『大本七十年史』上（大本、1964年）より作成。

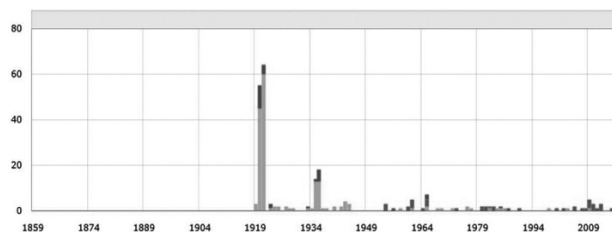
〈表-2〉 「皇道」という用語の検索結果



雑誌記事索引集成データベース

http://info.zassaku-plus.com 2017年10月閲覧

〈表-3〉 「大本教」という用語の検索結果



雑誌記事索引集成データベース

http://info.zassaku-plus.com 2017年10月閲覧

〈表-4〉 「1919年創設・創刊された各種団体及び雑誌」

団 体 名	2月	「扶信会」「人民同盟会」「大原社会問題研究所」
	3・4月	「北風会」「京都新人会」
	6月	「文化学会」「興国同志会」
	8月	「改造同盟」「啓明会」「大日本労働総同盟友愛会」「猶存社」
	10月	「青年改造同盟」「建設者同盟」「青年文化同盟」「大日本国粋会」
	11・12月	「一高社会思想研究会」「協調会」
雑 誌 名	1・2月	『社会問題研究』『我等』
	3月	『デモクラシ』『批評』
	4月	『改造』『社会主義研究』『国家社会主義』
	6・10月	『解放』『労働運動』

飯田泰三『批判精神の航跡』筑摩書房、1997年、194—195頁より作成

たちによってなされたとするならば、その明治維新の未完成を叫び、「第二維新」、つまり「大正維新」、「昭和維新」を主張した者たちは、「天皇への信仰」というある種の宗教性を帯びた者たちによって推進された。

このように、古代以来、居続けたき伝統的存在であり、神々の「後裔」たることによってのみ「神聖化」される「条件付きの相対的神聖者」⁶⁾であった天皇だが、1930年代における「昭和維新」運動のなかでは日本と世界を救う救世主の地位にまで高められる。この神格化された天皇と国民（天皇の赤子）が、一体化した意志の下に理想的な祭政一致の政治を行うという観念を、もっともラジカルに、しかも全国的かつ組織的に推し進めたのが他でもなく大本教でもあった。

かつて、夏目漱石は『こころ』（1914年）のなかに乃木大将が明治天皇の死に際して殉死したことに触れて、「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。」⁷⁾と、「先生」の口を借りて述べている。これについて、大澤真幸は「明治」という時代を「国民的な共同性の核となっている天皇との関係が、パーソナルな恭順でありえたような段階」と特徴づける⁸⁾。大澤によれば、大正期を象徴する民本主義（吉野作造）は「君

主を戴いているけれども、通常の共和制的な民主主義」の性格をもつものであり、天皇と国民の関係は乃木將軍が見せた態度とは明らかに異なる。ある意味「飾りとしての天皇」、または「機関としての天皇」であった。その後の「大正天皇」は病弱だったこともあり、また明治天皇に「やあ、兄貴」⁹⁾と声をかけたと言われる葦原將軍（葦原天皇、葦原帝）こと葦原金次郎に象徴されるように、明治天皇や後の昭和天皇の時代に比べて、「影」の薄い存在であった。このような関係は昭和に入り逆転される。「天皇に二重橋の前にお出でいただいて、国民といっしょに天皇を胴上げしようではないか」といった当時一部の青年将校の心情の中心にあったのは、「天皇への帰一を求める急進的な衝動」であった¹⁰⁾。そして、国民を天皇の「赤子」と位置づけ（「国民の天皇」）、天皇を神格化させたのが、昭和ファシズム期の特徴でもあった。

さて、上述したように最もラジカルに、しかも全国的かつ組織的に理想的な祭政一致の政治を行うという観念を広めたのが大本教だった。その方法は、後の多くの新興宗教の教団運営や布教のモデルにもなる。大本教は日本各地での講演会はもちろんのこと、新聞社を買収して

直接経営に乗り出したり、他の新聞社に資金を提供して「半機関紙」のように活用したり、また出版社を経営したりするなど、独自のメディアを積極的に活用して布教〈表-5〉を行い、教勢を拡大させた。とくに注目される時期は、第一次世界大戦中・戦後である。この時期に、軍人や知識人たちが熱狂的な信者として大本に入信し始めた¹¹⁾。1913年、最初に福中鉄三郎・海軍予備役が入信した。その2年後、福中の元同僚だった飯森正芳が入信した。彼は元々洗礼を受けたキリスト教信者であり、トルストイ主義者でもあった。この二人が火付け役となり、驚くほど多くの軍人、とりわけ海軍に属する軍人が大本へ集まった。

さらに1916年4月には飯森を通じて、その後数年間大本の急成長に貢献した浅野和三郎が大本にやってきた。浅野は第一高等学校を経て東京帝国大学英文科でラフカディオ・ハーン（小泉八雲）に学び、横須賀の海軍機関学校の教官を務めたこともある。また、英和辞典の編纂などにより英文学の領域では著名な存在であり、その歩みはまぎれもない知識人のそれであった。

浅野和三郎のほか、日露戦争で活躍した海軍少将・秋

山真之（1868-1918）や海軍大佐山本英輔、浅野の実兄である海軍中将・浅野正恭も大本の信者となった。綾部の近郊の舞鶴にあった海軍付属兵学校からも、将校や水兵に至るまで多くの軍人が綾部に集まった。さらに医学博士・岸一太（1875-1937）、そして必ずしも熱烈な信者ではなかったが、旧約聖書の予言を「筆先」で見たとして興味を抱いた劇作家で演出家の小山内薫（1881-1928）もいた。また松江市在住の医師・井上留五郎の大本入信を前後して、同市林木町に会員500人を越える大日本修斎会（後に大本教と名称を変更）松江支部が開設された。

その他、子爵・水野直、同岩下成一、鶴殿ちか子（熱心な信者となり大本内では大宮守子と名乗り、後に宣使〈布教師〉となる）、宮中顧問官・山田春三らが入信した。これらの人々が大本へと集まった時期には、たとえば内村鑑三の1918年から翌年までのキリスト教終末論に基づく再臨運動などが盛んに行われた時期と重なる。第一次世界大戦が重要なひとつの契機となったことは言うまでもない。

〈表-5〉大本の機関紙及び外郭団体の発行雑誌一覧表

歓団名	名称	創刊年	備考
大日本修斎会	本数講習	1908	文書配布による布教活動に着手（同年12月号（第4号）で廃刊）
	直霊軍	1909	2月15日、創刊
大本教	敷島新報	1914	8月15日、『直霊軍』を改題
皇道大本	神霊界	1917	1月、『敷島新報』を改題
	綾部新聞	同年	12月21日、対外宣伝紙として創刊
	大本時報	1919	10月5日、『綾部新聞』を改題
	大正日日新聞	1920	9月25日、日刊紙『大正日日新聞』買収し再刊（大阪）
	神の国	1921	8月10日、『神霊界』を改題
大本	新精神運動大本	1924	12月6日、エスペラント語、英語・フランス語も同時発行
	OOMOTO	1925	1月31日、エスペラント語機関誌
	瑞祥新聞	同年	2月1日、対外宣伝紙
	ヴェルダ・モンド	同年	6月、エスペラント語学習誌
	人類愛善新聞	同年	10月1日、「人類愛善会」の機関誌（1936年2月5日廃刊）
	真如の光	同年	11月5日、『瑞祥会報』を改題
	国際大本	1926	1月1日、エスペラント語機関誌をパリで創刊
	ことばのひかり	同年	2月、ローマ字機関誌、後に『NIPPON-ZIN』と改題
	明光	1927	8月30日、文芸機関誌（『月光』『月明』を合併）
	北国夕刊新聞	1929	11月12日、大本で経営
	昭和青年	1930	5月25日、「昭和青年会」機関誌（同年7月12日『昭和』と改題）
皇道大本	神聖	1934	10月1日、「昭和神聖会」機関誌

出典：大本七十年史編纂会『大本七十年史』上、（大本、1964年）より作成

2. 「大正維新」

2-1 大本教の「大正維新論」

広範囲の多数の人々から支持を得た大本教の教義はとも多義的で、読み方によっては、その意味がまるで異なる場合が多いが、ここではとりわけ、大本教の政治・社会改革論の骨子を示すものとしての「大正維新（皇道維新）論」—大本による「第二の岩戸開き」→日本の「大正維新」→世界の「完全円満なる理想時代」の到来—について一瞥しておこう。

大本が主張する「大正維新」論は、日本社会のあらゆる矛盾の原因を未完に終わらせた明治維新、すなわち、天皇による「王政復古」（祭政分離＝大日本帝国）に求めた。そして、その日本社会の矛盾を解決するための方法として提示されたのが、神意による「神聖復古」（祭政一致＝世界統一＝新たな楽土）の完遂—「大正維新」—であった。具体的な政策として掲げたのは、「世界大家族制度の実行」、「天産物自給の国家経済」、「私有財産の廃止」、「貨幣・租税制度の撤廃」、「国民の一般的男女の職業を制定」、「国民共同的な産業」などの実施だったが、それは出口王仁三郎自らが述べたように「未知半解な学者連中」に社会主義・共産主義と「誤解」させるには十分な内容だった。その具体的な内容は、以下のようである¹²⁾。

- ・絶対的に土地や財産の私有を許さざる事
- ・国民の一般的男女の職業を制定する事
- ・産業は国家経綸の目的に因つて国民共同的に従事する事
- ・産業的国民の収入は全部挙げて国庫の収入たるべき事
- ・貿易は国家事業として国際的に行はるべき事
- ・国民の生活に関する一切の物資は、経済者（商人）によりて円満に供給せらるる事
- ・国民住宅の全部は職業、家族、及び家庭に応じ、幸福の実現を目的とし供給せらるべき事
- ・全国交通機関は、必要に応じ全国民無料にて使用或は乗用に供せらるべき事。

以上は神聖なる皇祖御遺訓の大精神に因る国民的経済に関する国家経綸の要である。現代の議員制度に於ても、根本的改良を必要とし、第一神政後の議会は面目を一新して神聖なる神廷会議となすのである。而して貨幣制度、租税制度を根本廃絶する。

このような内容の「大正維新」運動を展開する中心に

いた人物は上述の浅野和三郎である。浅野は「大正維新の真相」という文章の「緒言」で、次のように述べている¹³⁾。

「この世界の大動乱は天地創造の際からの約束で、源を天地の祖神から発し、明治二十五年以来徐に開始されて居たのが、最近急速で発展しかけた迄だ。人力でこれが防止し得る事ではなく、又矢鱈に悲観したとて何の効益もない。」と述べ、「大正維新」を宿命的なものにとらえていた。このような浅野和三郎にとって「大正維新」は、「日本から云へば、大正維新であるが、諸外国を含めて云へば世界の大改造であり、大本神諭の筆法で云へば世界の大立替大立直である。さらに神霊界を含めて云へば身魂の大掃除、大洗濯であり、宇宙の大修祓である。〔中略〕国際的には日本天皇の世界統一であり、社会的には霊的階級の厳守を伴へる世界大家族制度の実現であり、又実務遂行の上からみれば神人合一、祭政一致であり、教から云へば天地間純一無二の惟神の大道の普及である。綾部の皇道大本は此実行機関として特定されたる、世界独一無二の大中心であるのだ」

さらに、第1次大本事件（1921年2月12日）の直前に『大正日日新聞』に掲載された文章にも「宿命」としての「大正維新」が語られており、「大正維新」への期待の高さが窺える¹⁴⁾。

「しかし乍らモウ駄目だ。本家本元の欧羅巴があの^{ていたらく}為体。もがけばもがく程自己の立場を困難ならしめ、天下に対して顔向けが出来なくなる許りだ。大正九年まではお茶を濁せたかも知れぬが、大正一〇年となりてはモウ出来ない。何となれば大正一〇年は、物質万能主義の総決算期に属し、同時に新たな霊的文明の建設さるべき大転換期に属するからである。これは天地の宿命であり、超人的大威力で遂行されるものである」

「天地の宿命」としての「大正維新」を実行する大本教の聖地「綾部」は、「地の高天原」にたとえられた。「神界の中央政府から直接神勅を仰ぎ、之に拠りて世界一切の問題を解決し、実行する『地の高天原』である。綾部を預言でもする所だと思ふと甚だしき勘違ひだ。預言でなくて実言だ。世界の事は総て爰で決議され、爰で計画され、また爰でじっこうさるるのである（傍点—原文）。」¹⁵⁾。

このように、「綾部」を中心に実行される「大正維新」

は「宇宙の大修祓」にまで同心円的に拡大されるものとされたが、後の出口王仁三郎の「型」の論理の原型がすでにここにみられる。

2-2 大本教以外から主張された「第二維新＝大正維新」

「第二維新」の語は、1890年代「平民主義」を掲げる民友社グループによって用いられた。たとえば徳富蘇峰は『吉田松陰』（初版、1893年）の末尾で、「維新の大業なかば荒廃し、さらに第二維新を要するの時節は迫りぬ」¹⁶⁾と述べた。この語は、1910年代から再び使われ始め、1920年代に入りより革新的な傾向の強い「大正維新」そして、後の「昭和維新」という言葉に結合する。

1921年に大川周明が『日本文明史』で述べた「第二維新」（「大正維新」）論は、1917年に出口王仁三郎によって主張された「大正維新論」と類似する点が多い。大川周明は、「何故に我等は第二維新の必要性を高調する乎。曰く日本は君民一体の国なるが故である。〔中略〕明治維新の破壊的一面は『討幕』の一語に尽き、其の建設的一面は『勤王』の一語に尽きた。大正維新に於ては倒さる可きものは黄金を中心勢力とする閥であり、興さる可きものは国民其ものである。即ち大正維新の標語は『興民討閥』でなければならぬ」と述べている。

また、「大正維新」という言葉は、朝日平吾の「サラニ世ノ青年志士ニ檄ス。…大正維新ヲ実行スベキ天命ヲ有セリ…シカモ最急ノ方法ハ奸富征伐ニシテ、ソレハ決死ヲモッテ暗殺スルノ外ニ道ナシ」というように、破壊の手段を用いてでも達成させるべきものとして登場した¹⁷⁾。このように、出口王仁三郎の「皇道維新」、大川周明の「興民討閥」、朝日平吾の暗殺の論理は、後の「昭和維新」運動で再び登場することとなる。

2-3 出口王仁三郎の「入蒙」と教義の変化—矛盾なく拡大される「国民的使命」

第1次大本弾圧（1921年）後から、大本教の教義は大きく変化した。初期の過激な終末論や排外主義的な主張が影をひそめ、全体的により普遍主義的な側面が全面に浮上してくるようになったのである。具体的には、アジアを含め世界の諸宗教との提携、エスペラント語の普及運動、人類愛の強調など、全世界の平和の実現を自らの使命とする一方、普遍主義的な主張の増加に比例して大本教の使命もまた拡大解釈されていき、従来の「艮の金神（—出口なおに憑依したとされる神）」によって大本教に与えられていたとされる使命（—日本国民の改心を促すという使命）が、新たに日本がアジアおよび世界を

指導していくのだという日本の「国民的使命」として拡大解釈されていくことになる。このことは、大本教の「神の経綸」を究極的な一元的真理と信じて疑わなかった出口王仁三郎が、その「神の経綸」が及ぶ範囲を拡張させることを、自らの義務として確信するに至ったことを意味した。

このような教義の変化について安丸良夫は、出口なおの「立替え立直し」の理念を基本的に継承しながらも、第1次大本事件当局と再び衝突することを回避するために、迂回戦術を介して展開したものと分析した¹⁸⁾。実際に、出口王仁三郎は、これまで社会問題や政治の在り方を正面から批判してきた大本の教義を、巧妙にも霊的世界の物語に脚色した。この過程で起きた大きな変化は、神話（出口王仁三郎にとっては歴史）を新たに解釈する（『霊界物語』）ことによって、自らの使命をより明確にしたことと、教団内の勢力争いを終わらせ、大本教唯一の指導者としての地位を確実なものとしたことである。

大本教が従来持っていた排外的なエスノセントリズム（ethnocentrism）を普遍的な「人類愛」へと矛盾なく媒介させる論理として出口王仁三郎が提示したのが「型」の論理だった。「型」の論理とは、「理想世界の雛型・地上天国の縮図」としての大本教のあらゆる活動や出来事は「型」となり、日本や世界にも出現するというものである¹⁹⁾。時間的には過去—現在—未来、空間的には、綾部—大本教の聖地—を日本列島に、日本列島を世界の大陸とそれぞれ対応させることで、出口王仁三郎はある意味、この論理をもって大本教の過去に日本の現在を見出すとともに、それと同時に大本教の現在の姿の内に日本や世界の将来を見定めていたともいえよう。

このような教義の変化とともに、注目されることは出口王仁三郎の入蒙（1924年2月から7月）である。1924年に朝鮮を経由して蒙古に渡った出口王仁三郎は「神功皇后三韓を征し、秀吉は大明に入り、吾は蒙古に進めり。大蒙古は昔の日本の領地なり、恢復するは今人の義務。亜細亜とは葦原の意義、あし原は我日の本の国名なりけり。満蒙支那は神代の日本の領土なり、とり返すべき時到来りつつあり」と述べ、蒙古に新たな「宗教王国」の建設を準備した²⁰⁾。

これまであまり注目されてこなかったが、出口王仁三郎自らが構想した「蒙古王国」、「明光帝国」をはじめ、1932年の「満州国」の成立前に、同地において実に様々な建国運動があり、大本教はそれらに直・間接的にも関与していた。1910年代から朝鮮の一進会による「鳳の国構想」、^{ジョン・アン・リップ}鄭 案 立の「大高麗国」、「世界聯邦自治運動」、

さらに柳東説ユ・ドンセルによる「高麗国」、崔東曦チュ・ドンイの「満洲中立国」、そして「第1・2次満蒙独立運動」、ロシア出身のセミヨノフによる「蒙古活佛独立計画」など、様々な宗教王国建設運動や自治・独立運動が同時併発的に展開された²¹⁾。しかし、歴史に名を残したものは一つもなかった。これらすべては、当時日本の大陸政策に規定されながら様々な偶然と紆余曲折を経た後、「幻」に終わった。

しかし、「幻に」終わったこれらの運動は、決して日本の大陸侵略を隠蔽し正当化するための「イカスミ」ではなかった。後の「満洲国」がもっぱら関東軍の一存で建国されたわけではなく、複雑な国内外の政治的状況のなかで、それを底支えた人々の思想や行動にも規定されながら建国に至ったことを考えれば、「満洲国」誕生につながる宗教運動を単なる「裏工作」として片付けることはできないからである。たとえ、「裏工作」としての側面を持っていたとしても、それがもった意義や影響を無視してもいいことにはならない。なぜなら、ある種の宗教的熱狂が、外から見ればどうしようもなく非合理的なものであっても、これが国家権力を超えたり、あるいは国家理性を麻痺させたりしたことは、すでに歴史が証明していることである。「満洲国」誕生に繋がる宗教運動が有した宗教的熱狂が、軍事戦略以上の意味をもって関東軍の暴走を支え、その結果としての「満洲国」の誕生を梃子に、より一層増幅された形で日本国内の改造を主張する「昭和維新」へと繋がった側面がある。

この時期に顕著にみられる「特殊（日本）と普遍（世界）」の矛盾を出口王仁三郎はどのように解決しようとしていたのだろうか。出口王仁三郎自身が「大陸の征伐と侵略」を拒否する一方で、蒙古は将来、日本の植民地になると公然と語ることを、簡単に彼の偽善であるとして蹴するのは短絡的過ぎると思われる。なぜなら、出口王仁三郎はその「偽善」という非難を無理解からくる誤解と受け止めていた。彼にとっては軍事的手段を用いることと、アジア諸民族の「精神的結合」という理想は何等矛盾するものではなかったのである。少なくとも自分の目的を達成するために、より害のない方法を用い、自分自身平和を愛する宗教指導者として、蒙古での行軍中は武器を携帯することを自らに禁じた限りでは、出口王仁三郎にとって両者の間に矛盾はなかったのである。さらに「人類愛」についても同様のことがいえる。「人類愛」が最初から日本が中心でなければならぬことの矛盾を出口王仁三郎は、いとも簡単に解決してみせたのである²²⁾。「人類」という語の真意を人間一般ではなく、「神

の留まる者」としたことによって、普遍的な意味を持つ言葉を特殊な日本に限定されてしまうことに対しても何等矛盾することはなかったのである。

3. 「昭和維新」

3-1 「昭和維新」論の登場と大本教の「昭和青年会」結成

「満洲事変」直後の大本教では、在郷軍人会や昭和青年会が動き始めると同時に、国防婦人会などの組織が新しく作られた。同時期の日本社会はどのような状況にあったのだろうか。

1932年2月末、いわゆる「爆弾三勇士」で日本中が大騒ぎとなり、翌33年には国際絵連盟を退場した松岡洋右まつおかようすけ（1880～1946）が熱狂的な歓迎を受けた。日清・日露戦争の時と比べ、とりわけ満洲事変に際して民衆が熱狂した理由について、橋川文三は、民衆の間に潜在していた日露戦争を起源とする「満洲神話」の存在を指摘した。「満洲神話」とは、満洲という地域が日本近代史のなかで、国民意識に神話的なイメージとして定着したことを指しているが、具体的には満洲は「明治天皇の最大の御遺産」、すなわち国家百年の大計のもとに天皇が残してくれたものというイメージと、そこに「十万の英霊」が眠っているというイメージのことである²³⁾。

さて、出口王仁三郎が「昭和維新」運動を全国的かつ組織的に展開するために、満洲事変直後の1931年10月、全国各地の青年会組織を糾合して再組織化したのが「昭和青年会」である。すでに同年8月には、大本教のもう一つの聖地とされる亀岡で「昭和青年会」の査閲式が行われた。出口王仁三郎は天皇と同様に白馬に乗り、会員は軍人色の濃い服装に丸型帽子を着用した。これらは職業軍人出身の信者・有留弘泰や、十師団ならびに憲兵隊から派遣された現役軍人らによって指揮された²⁴⁾。ちなみに、関東軍が日本からの分離独立と軍事政権の樹立を目論んだ「十月事件」（1931年10月クーデター未遂事件）の前に、出口王仁三郎はその中心人物橋本欣五郎はしもと きんごろうに、「有事の際は東京に次で全国の信者を動員すべく」²⁵⁾と申し入れたともいわれている。

軍隊の様相を呈する「昭和青年会」に向けて出口王仁三郎は次のように激を飛ばした。「昭和維新を断行するためには、刀を出す覚悟が必要」であり、「昭和維新の大業を担うのは、決して白頭の老人達や濁世だくせいの流れに穢れた策士連ではない、じつに赤き血に燃える至誠純情の青年でなければならない」²⁶⁾。

「昭和青年会」の幹部らによる「昭和維新論」に関す

る主張も日々過激なものとなっていた。代表的な主張をいくつかあげると、

- ①「昭和維新の志士たるべき昭和の青年吾等、果して明治維新の青年一西郷、大久保、木戸、高杉、久坂、橋本、頼等々に対して顔色ありやなしや」²⁷⁾。
- ②「ああ内憂外患多事、多難、時運は既に充ち充ちている。〔中略〕小事を捨てて大局に生きよ、携へて昭和維新の志士たれ！ 〔中略〕今度こそは左翼にも右翼にもなしとげられぬ神政復古、最後の御維新なのだ！！ 〔中略〕維新の大業を敢行して永遠にはほえむ明治の志士が羨ましくないか青年！ 立つて自ら昭和維新の志士となり、更に大なる忠勤をなせ！」²⁸⁾。
- ③「昭和維新断行の秋」（頭山満）「現時百般の施設は日本本来の軌道を脱し、所謂欧米文化の為に真理の太陽は覆はれ、皇道は光を失つてしまった。真理は神、即ち皇道である。真理の行はれざる処に神はない、故に神の加護なくして神国日本の面目はない。明治維新は遂に完成されず再び維新達成の秋は来た、明治維新と今日と比較すれば、当時は徳川あるを知つて、天皇あるを知らず、今日は欧米文化あるを知つて日本本来の真理……皇道あるを知らず、……己を捨てて大義に就き、之れが達成に邁進することが日本人本来の面目であり使命である」²⁹⁾。

3-2 「昭和神聖会」の誕生と「昭和維新＝皇道維新」の具体的な内容

当時の国家主義団体は、ほとんど大衆的組織基盤をもっておらず、しかも、組織機構を整備していなかった。ごく少数の幹部が勇ましいスローガンを掲げていたに過ぎず、経済的基盤も弱かった。これに比べて大本教は、その組織力や資金力において他の追従を許さないほどの影響力をもっていた。出口王仁三郎は1934年7月22日に、「昭和青年会」を前衛部隊とする「昭和神聖会」を結成した。東京・九段の軍人会館で開かれた開会式には3000人以上の参加者が招かれたが、その顔触れは以下のとおりである。

出口王仁三郎をはじめ、一条実孝副統管・内田良平、内相・後藤文夫、衆議院議長・秋田清、元政友会の松岡洋右、後に東条内閣で内相を務めることになる陸軍中將・安藤紀三郎、佐藤清勝、渡辺良三、貴志弥次郎などの陸軍中將、頭山満などが次々と挨拶を述べ、この会の賛同者として名を連ねているのが通信大臣・床次竹次郎、文部大臣・松田源治、農林大臣・山崎達之輔、そして赤松克麿などの何人かの国会議員、海軍将官のほか、

満川亀太郎（元猶存社共同設立者）、倉田百三（作家）、岩崎清七（実業家）、さらに、一連の国家主義団体の幹部たちも名を連ねた³⁰⁾。

出口王仁三郎は「事勿れ主義の張本人」政治家や学者による「左傾と右傾は国民に天国を説きつつ地獄に陥落せしめ……地上に地獄と闇黒と不安を招来せんとする」だけなので、非常時の日本の「暗黒界を此際シヤベリ直し書き直して真の日本に復帰せしめる」ことこそを「昭和神聖会」の使命と考えていた³¹⁾。

この使命を達成するためには、北一輝や美濃部達吉のように、国家を権利義務の帰属する法律上の人格とみなし、天皇を国家の一機関と明確に規定するものではなく、むしろ、天皇を世界の国土や財産の所有権をもつ主体とみて、国民をそれらの賃借権をもつものと出口王仁三郎は主張した。その具体的な内容は「大正維新論」と類似している。国民が基本的には土地に基づいた「天産物自給」を基礎とし、金銀ではなく、天皇の権威に基づく紙幣を交換手段とすべきであるとしている。

つまり、明治維新は「兵馬の権」（軍事）は奉還したが、経済権を奉還していないことが根本的な誤りであったため、これを是正する必要があるとされた。そのため、あらゆるものを一旦皇室に還元し、皇室がそれを元に紙幣を発行する。また海外貿易は物々交換を原則とすることで為替の変動にも影響されず、金銀問題が直ちに解決するとした。このような皇道経済の上で行う皇道政治は「軍農中心」であるべきだと主張した。皇道政治の実現のためには「農民八十億円の債務を政府より弁償する事」、「凡ての税は皇道経済の独立する迄免除し、国民の更生をはかる事」、「国防及び産業発展の為、全国に二十間巾の縦横大道路を急設すること」、「国教院の開設により、宗教教育制度の改革を断行し、国教によりて国民思想の改善をはかる事」が必要とされた³²⁾。いずれも実現可能性のないものばかりではあるが、現在の所有の不平等を克服するためには、天皇に一切の所有権を帰属させ、国民が生活保証を得ようとする考えを基調としている。この荒唐無稽で過激すぎるほどの政策の提示には当時代のドイツとイタリアの政治状況が一つのヒントとなっていたと思われる。「昭和神聖会」の結成に際して、出口王仁三郎は自らの決心を次のように述べた³³⁾。

時恰も伊太利にムツソリーニが現はれ独逸にはヒトラーが現はれ、大勢挽回に勉めて居るが、……我国も此儘で行つたならば如何なるか知れないといふやうな氣運の中にある。そこで私は本年一月（1934年-引

用者)以来東京に上り政治家、其他各要路の人々の意見を叩いて見たが、大抵の人はこの大難局を目前に見乍ら、総てが自己主義であり、事なかれ主義である。所謂スローモーションであり或はノーモーションである。之ではいけないと私は深く感じ、遂に身命を賭しても我皇国の非常時を打開し天津日の大神の御神勅通りに日本の光りを世界各国に輝かさねばならないと固く決心したのである。

3-3 「昭和神聖会」の活動の特徴

「昭和神聖会」が関与した主な政治運動としては、「軍縮反対運動」、「国防の強化と農民の救済運動」、「国体闡明運動」をあげることができる。以下では、「昭和神聖会」が行った個々の活動について詳述ではなく、主な特徴についてだけみてみよう。

特徴①ファシスト的な言動

・絶対服従³⁴⁾

絶対服従は天下統治の大本《たいほん》なり。私意を加へ言論をなす者は断然除名して神聖会の統制を保つ覚悟を要する。

余は独裁工作を絶対に行ふのだ。合議制によりて成功せしこと古今未だその例を見ないのである。

天上の月も日も一体だ。地上の主権者も亦一柱なるが真理だ。神聖会また統制上一人の独裁を要する。統制を破る言動は例へ善言なりとも不可である。統管の命を用ひざる者は断然除名せなくてはならぬ。上役の命亦之に準ずる。

・英雄としてのファシストたち³⁵⁾

ケマルパシヤー、ムツソリーニ、ヒットラー等の英雄の心事は窺かに余が常に抱ける思想に酷似したるを見て余は大に意を強うするものである。必ず新しき日本を建設して見せる覚悟である。余は世間の団体員の如く決して空手形は振り出さない。屹度^{きつと}実行して見せる。強大なる組織と偉大なる宣伝力と正義に基づく実行力とによつてだ。

このようなファシストのような主張を繰り返した当時の出口王仁三郎だったが、イタリアのファシズム運動を日本に紹介した^{しもいはるきち}下位春吉(1883～1954年)の影響が大きい。ファシズムを「急進的ナショナリズム」であり「国民の歴史と伝統に依拠しつつ今現在もっとも必要でかつ適切な措置をとりつつ、国民を一つにまとめ上げることをめざす実際の運動」³⁶⁾と定義する下位は、「昭和神聖

会」地方支部での講演や各種宣伝物を作成するなど、旺盛な活動をみせた。ヒットラーの側近、ヨーゼフ・ゲッベルス(Joseph Goebbels:1897-1945年)の演説力や演出力には比較にならないほど遠く及ばないが、「昭和神聖会」での下位の役割はあたかもゲッベルスが担っていたようなものだった。だが、「ファシズムごっこ」のようなものでしかなかった。

『神聖会日誌』によれば、下位は1934年8月から翌年2月まで、ほとんど毎月のように日本各地で海軍の将校とともに本会主催の講演会や「昭和神聖会」各支部発足会に講師として招かれていた。また出口王仁三郎の地方巡行にもほとんど随行した³⁷⁾。「昭和神聖会」の要請を受けて、下位春吉が作成した緊急な懸案は、第一に貧困に喘いでいる農民や都市貧民層救済、第二に教育制度改革、第三に既存政党の消滅、第四に財閥解体、第五に金銀の保有高と連動しない紙幣の発行、第六に国防を確保するために国民の「総動員」の公示、第七に外交政策では日本の文化や政治を世界に向けて発信すること、などであった³⁸⁾。

「昭和神聖会」がファシストを模範としていたこと、あるいは出口王仁三郎が天皇の行幸を真似していることなどについて法廷で追及された時、「出口も調子に乗ったかもしれぬが、[中略]これは下位春吉の考案」³⁹⁾だったと、清瀬一郎弁護士が弁護していたほどであった。

特徴② 非暴力による「昭和維新」

テロやクーデターに訴えようとした一部の団体や軍人とはちがって、「昭和神聖会」は暴力的手段に訴える盲目的な行動主義には警戒していた。下位春吉が政治的にラジカルな方針を取っていたのに対して、出口王仁三郎は「テロを以て或る一つの目的を遂行せんとするは狂犬にも勝る卑劣の行為だ。神国日本の大恥辱だ。凡て合法的に着実に行動し、人類愛善の本義に則るべきだ。……日本人の血は一滴も流してはならぬ。神聖会の運動に武器は禁物だ」⁴⁰⁾としてあくまでも「無血」の「皇道維新」を目指した。出口王仁三郎が「巨砲の如き宣伝力と共に鋼鉄の如き組織力」をもつものと自任していた「昭和神聖会」をもって成し遂げようとしたのは、失業問題や農村の困窮を解決することであって、クーデターによる権力掌握ではなかった。出口王仁三郎が追求したのは「民衆の力を結集すること」による社会変革であった。

当時の「昭和神聖会」の活動は公安当局も注視していたが⁴¹⁾、1934年12月半ば、近畿地方のある県から届いた

報告からも当会の活動が「民衆の力を結集すること」に力点が置かれていたことがはっきりとわかる。たとえば「一千万人の神聖会員を得れば、十万人の代表者を選び、皇道経済確立を敢行すべく二重橋で勢揃いし、大衆運動を為し、血を見ずに昭和維新を断行する考えなり(傍点-引用者)」との記述があり、鳥取県や東北地方で救農請願運動のために、大本の組織動因計画があるとの報告が届けられていたが、あくまでも非暴力による「昭和維新」運動を展開しようとしていた。

3-4 第2次大本事件と「天皇制ファシズム」の主役交代

1931年に「昭和青年会」の結成直後から大本教の動きを注視していた京都府の警察当局は、1935年12月8日午前零時、一斉に大本の敷地を占拠、大本教義資料、宣伝文書などを押収した。

かけられた嫌疑は、不敬罪容疑であった。第2次大本事件(1945年敗戦にともなって大赦令で不敬罪は解消)は共産主義運動(主に天皇や私有財産の否定)の取り締まりを目的として作られた治安維持法が宗教団体に適用された最初の事例でもあった⁴²⁾。

すでに述べてきたように、大本教の展開する組織的な運動は、これまでのテロやクーデターに頼った右翼や青年将校のそれとは異なる。その活動はいずれも大衆の基盤をもたない小集団に過ぎなかった右翼団体を糾合、あるいは組織や資金を提供する形で展開された。しかし、宗教的な信念によって支えられた全国的な大衆組織力もさることながら、社会への影響力という点でも、ヨーロッパのファシズム運動に引けを取らない運動がひとつの宗教団体から発生してきたと見受けられ、しかも統御することが難しい「大衆という基盤」をもって展開された大本教の活動は、公安当局の手を焼かせるのには十分過ぎるものだった。

大本教の教義や運動は後の国家による「天皇制ファシズム」よりもラジカルなものであり、その意味で「天皇制ファシズム」への道を国家よりも一歩先に歩いていた。しかし、大本教の「昭和神聖会」活動が直接的にもたらしたものは、自分たちに有利な形で決定的な権力の移動を生じさせたのではなく、自らがその犠牲に供されることであった。その中心にあり続けた出口王仁三郎は1948年に亡くなるが、彼の人生は一流の脚本家が描いたような人生そのものであった。

大本教や既存の超国家主義者たちよりファシズム運動の主役の座を奪った国家権力は、皮肉にも自らが弾圧し

た者たちの意志や構想を充実に引き継ぐような形で、「天皇制ファシズム体制」(「国民総動員運動」、「国家総動員法」、「新体制運動」、「大政翼賛会」)をつくりあげた。合理的な近代官僚システムを駆使して天皇の神格化を推し進め、国民を「天皇教」信者へと総動員したのである。従来見られなかった日常的な宮城遙拝の強要、そして日本国内のみならず、朝鮮、台湾、さらに満洲でも、決まった時間に一斉に皇居に向けて遙拝するという異様な光景を作り出したのである。

おわりに

これまで大本教の出口王仁三郎の「皇道維新」に関する思想と行動の特徴を時代文脈のなかでみてきたわけだが、これらの運動の目的は、一方には現実の諸矛盾から民衆を救い出すことにあり、他方には自己にアイデンティティを付与する共同体、その共同体のナショナルアイデンティティの確保にあった。人のアイデンティティは社会的な関係性のなかで付与される。したがって、半ば必然的に過去の条件や他者からの承認に規定されることになる。ナショナルアイデンティティのレベルからいえば、その日本という共同体を承認してくれたのが「中華」であり、「欧米」であった。しかし、明治維新と日露戦争の勝利によって、この両者を否定するとなると、理想としての「他者」を再び外に求めるか、または、自らの共同体のなかから超越的な他者を「検索」または「創造」しなければならない。

大本教の出口王仁三郎がとった態度は後者である。彼は、日本という共同体の始原にまで遡って「シヤベリ直し書き直して真の日本に復帰せしめる」ことで、自らが属する共同体のアイデンティティを新しく確保しようとしたのである。そこから諸矛盾を増幅させるだけの存在とみなされた現実の国家は「皇道維新」(「大正維新」・「昭和維新」)の断行によって否定されるべきだという論理が導き出される。そして、その「第二の維新」の成功が「理想的な国家」を現実にもたらす。「理想的な国家」の普遍的かつ超越的な指導者によって、あらゆる矛盾—現実の貧富の格差のみならず、神話と歴史との直結、日本という特殊なネーションとその日本が無条件にアジア、ひいては世界の「盟主」であるという矛盾—は解消されると考えていた。このような論理は、濃淡・強弱はあるが、「昭和維新」に共感し、それを支持した者たちに共有されていたのである。

出口王仁三郎の思想と行動は「政治的ロマン主義」なしい「ファシズム」の傾向を強く帯びるものであった。

大本教の思想と運動の特徴をファシズムのそれと対照してみると⁴³⁾、

①ファシズムは、ナショナリズムの何らかの意味における先鋭化（急進化、過激化）された形態である。

②極端な指導者崇拜もまた多くのファシズム的な思想・運動・体制に共通した特徴をもつ。

③指導者崇拜は、国家全体を支配する組織原理となる。

④思想的には、ファシズムは、共産主義と自由主義との双方に対して明確に反対の姿勢を取る。共産主義は外部の脅威として、自由主義（議会制民主主義）は内部の邪魔者として排除される。

大本教の出口王仁三郎の思想と行動は4つの特徴と「概ね」一致する。しかしながらその思想と行動を「天皇制ファシズム」を推し進める他の団体、青年将校らと比較した場合、決定的に違う点は、テロやクーデターのような暴力的手段に訴える盲目的な行動主義とは一線を画し、「大衆的な基盤」に基づいて、あくまでも「無血」の「第二維新」を目指したことである。第2次大本事件後の「天皇制ファシズム」がもたらした暴力的結果の歴史を考えれば、この点はいくら強調しても過ぎることはない。

注

- 1) 浅野和二郎「大正維新の真相」（1919年7月8日）、前掲『大本史料集成』I、160-64頁。
- 2) 大澤真幸『戦後の思想空間』ちくま新書、1998年、93-7頁。
- 3) 橋川文三『昭和維新試論』ちくま学芸文庫、2007年、75頁。
- 4) パウル・ティリッヒによれば、「政治的ロマン主義」は伝統宗教者集団であれ、ファシズムやナチズムであれ「起源への回帰」という共通した特徴をもつ。個人や集団が自らの始源や起源神話を強調することにより、己の脆弱さを隠しつつ、そのイデオロギー体制への帰順を信者や大衆に対して強制するものである。パウル・ティリッヒ「プロテスタンティズムと政治的ロマン主義」『ティリッヒ著作集』第1巻、古屋安雄、栗林輝夫訳、白水社、1978年、参照。
- 5) 飯田泰三『批判精神の航跡—近代日本精神史の一稜線—』筑摩書房、1997年、194-95頁。
- 6) 藤田省三「異端論断章」（『異端論断章』藤田省三著作集10、みすず書房、1997年）、40-41頁。
- 7) 夏目漱石『こころ』岩波文庫、1989年、421頁。
- 8) 大澤真幸『戦後の思想空間』ちくま新書、1998年、参照。
- 9) 大澤真幸『思想のケミストリー』紀伊国屋書店、2005年、118頁。

- 10) 前掲、橋川文三『昭和維新試論』255頁。
- 11) 知識人や軍人などの大本入信に関しては、大本七十年史編纂会編『大本七十年史』（上）、大本1964、338-491頁（以下、『大本七十年史』（上））。
- 12) 「大正維新に就て（『神霊界』1917年3月）」『（復刻）出口王仁三郎全集』（第1巻、天声社、1998年、349頁、以下『全集』、巻数のみに略記）。「大正維新」と「昭和維新」について、今井清一・高橋正衛編『現代史資料4 国家主義運動1』（みすず書房、1963年、482頁）。また、橋川文三「昭和國家主義の諸相」『現代日本思想大系31 超國家主義』（筑摩書房、1966年）に詳しい。
- 13) 同上。
- 14) 前掲書、『大本七十年史』上、683-84頁。
- 15) 浅野和二郎「大正維新の真相」（1919年7月8日）、池田昭編『大本史料集成』I、三一書房、1982年、160-64頁。
- 16) 徳富蘇峰『吉田松陰』岩波文庫、1981年、230頁。
- 17) 今井清一・高橋正衛編『現代史資料（四）国家主義運動（一）』みすず書房、1963年、482頁。なお、朝日平吾に関しては、橋川文三「昭和國家主義の諸相」『現代日本思想大系31 超國家主義』筑摩書房、1966年、および『増補版橋川文三著作集』5、筑摩書房、2001年に詳しい。
- 18) 安丸良夫「解説」『出口王仁三郎著作集』第2巻、442頁。なお、前掲『評伝 出口王仁三郎』148頁、参照。
- 19) 「神聖運動とは何か（『神聖』1935年7月）」、池田昭編『大本史料集成』（II、三一書房、1982年）804頁。
- 20) 出口王仁三郎「国威発揚」『昭和』1933年2月号『出口王仁三郎全集』第1巻、天声社、1999年、377-78頁。
- 21) 「満洲国」の建国過程を明らかにするための作業の一環として、すでに「満洲」における朝鮮独立運動・自治運動が日本のアジア主義者、とりわけ内田良平や末永節らの大陸進出工作と重なり合いながら展開された「大高麗国」建国運動を分析したことがある。拙稿「「大高麗国」建国構想の歴史的意味」（『学術論文集』第27集、朝鮮奨学会、2009年、99-114頁）を参照されたい。
- 22) 「愛善の真意義」『神の国』1926年4月、（前掲書『復刻版 出口王仁三郎全集』第1巻、所収）432-36頁。
- 23) 「（座談会）一九三〇年代という時代」『歴史公論』第6号、1976年5月、15-17頁、参照。
- 24) 大本七十年史編纂委員会編『大本七十年史』下、大本、1967年、442頁。
- 25) 中野雅夫『橋本大佐の手記』みすず書房、1963年、146頁。この計画には、大川周明、岩田愛之助、北一輝、西田税、赤松克麿・亀井貫一郎らも深く関与していた。しかし、大本側は後に「十月事件」に教団としては関知していなかったと主張している。前掲『大本七十年史』下、331頁。
- 26) 「巻頭言集」『昭和青年』1930年6月、1932年1月。前掲『大本史料集成』II、467頁、472頁。
- 27) 神本泰昭「昭和維新に対する一考案—挙国更生運動と青

- 年一」『昭和青年』1933年1月号。同前書、586-88頁。
- 28) 山田筑波「昭和維新の志士たれ」『昭和』1934年11月号。同前書、670-71頁。
- 29) 頭山満「昭和維新断行の秋」『神聖』1934年11月号。同前書、727頁。
- 30) 前掲『大本七十年史』下、172-73頁。
- 31) 前掲『大本史料集成』Ⅱ、403-14頁。
- 32) 出口王仁三郎「皇道経済我観」『出口王仁三郎著作集2』、225-33頁。この文章は、1934年7月25日にパンフレットとして発刊され、その後『人類愛善新聞』1934年8月中・下旬号・9月上旬号に連載された。
- 33) 「肇国皇道の大精神」『神聖』1934年11月号。前掲『大本史料集成』Ⅱ、720頁。さらに前掲『大本七十年史』下、165-66頁。
- 34) 「統管随筆第1篇」1934年10月10日、前掲『大本史料集成』Ⅱ、403-08頁。
- 35) 「統管随筆第2篇」1934年11月28日、前掲『大本史料集成』Ⅱ、412頁。
- 36) 下位春吉『伊太利の組合制国家と農業政策』ダイヤモンド社、1933年、8頁。
- 37) 「神聖会日誌」、前掲『大本史料集成』Ⅱ、818-72頁、参照。
- 38) 下位春吉「解かねばならぬ七つの謎」『新生』1935年3月号、4-14頁。
- 39) 「控訴審清瀬一郎弁論速記録」1942年3月13、14日。前掲『大本史料集成』Ⅲ、708頁。
- 40) 「統管随筆第一篇」前掲『大本史料集成』Ⅱ、403-08頁
- 41) 杭迫軍二「大本事件日記」『警察協会雑誌』1936年7月号、44-5頁。
- 42) 『大本教事件証拠調関係書類』p.21、Ref.A07040001900（アジア歴史資料センター）。
- 43) 大澤真幸『〈不気味なもの〉の政治学』新書館、2000年、参照。
- 館、1942年
- 大本七十年史編纂会編『大本七十年史』（全二巻）、大本（京都）、1964～67年。
- 出口王仁三郎『出口王仁三郎著作集』読売新聞社、1972年
- 『復刻版出口王仁三郎全集』第1巻、天声社、1998年
- 出口なお・村上重良校注『大本神論 天の巻』平凡社、1979年
- 池田昭編『大本資料集成』（全3巻、「Ⅰ思想編」「Ⅱ運動編」「Ⅲ事件編」）、三一書房、1982～85年
- 村上重良・安丸良夫校注『日本思想大系（六七）民衆宗教の研究』岩波書店、1971年
- 橋川文三・松本三之介編『近代日本思想史大系第3巻 近代日本政治思想史Ⅰ』有斐閣、1971年
- 松本三之介『日本政治思想史概論』勁草書房、1975年
- 『明治精神の構造』岩波現代文庫、2012年
- 橋川文三編『現代日本思想大系三一・超国家主義』筑摩書房、1975年
- 橋川文三『昭和維新試論』ちくま学芸文庫、2007年
- 河上徹太郎・竹内好他『近代の超克』富山房、1979年
- パウル・ティリッヒ『ティリッヒ著作集』第1巻、古屋安雄、栗林輝夫訳、白水社、1978年
- 安丸良夫『出口なお』朝日新聞社、1977年
- 安丸良夫他編『岩波講座 宗教と権威』岩波書店、2002年
- 松本健一『出口王仁三郎』リプロポート、1986年
- 丸山真男『超国家主義の論理と心理』『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1964年
- 見田宗介『社会学入門』岩波新書、2006年
- 飯田泰三『批判精神の航跡—近代日本精神史の一稜線—』筑摩書房、1997年
- 『大正知識人の思想風景「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』法政大学出版局、2017年参照
- 川村邦光「救世主幻想のゆくえ ファシズム期の宗教と文化」竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』水声社、2010年
- 大澤真幸『戦後の思想空間』ちくま新書、1998年
- 『〈不気味なもの〉の政治学』新書館、2000年
- 『不可能性の時代』岩波新書、2008年
- 對馬路人「『人類アイゼン新聞』解説」『復刻版 人類アイゼン新聞 別冊』不二出版、2013年

参考文献

- 浅野和三郎『皇道大本の概要』大日本修斎会（綾部）、1920年
- 林逸郎『大本教事件辯論要旨（速記）』上・下編、大越膳寫